

平成30年 5月22日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370562

研究課題名(和文) 中英語と初期近代英語の連続性に関する研究 コーパス言語学と歴史社会言語学の融合

研究課題名(英文) From Middle English to Early Modern English: A Historical Sociolinguistic Approach Based on Corpus Linguistic Methods

研究代表者

家入 葉子 (Iyeiri, Yoko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：20264830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：中英語と初期近代英語期は、いずれも英語史研究で重要な意味をもつ変動期であるが、それぞれ独立に研究されることが多い。本研究ではその連続性に着目し、以下のような分野の研究を行った。まず、中英語の否定構文の変化と初期近代英語の助動詞doの拡張を連続的に捉える研究、次に動詞の補文の構造(that節、不定詞、動名詞構文等)についての研究、最後にalwaysの語尾に付加されている-sなど、形態に関する研究である。中英語から初期近代英語期にかけての連続性に焦点を当てるとともに、この時期の変化を英語史全体の枠組みで解釈し、現代英語へのインパクトについても考察した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project has been to highlight the continuity of language change between the Middle and Early Modern English periods. For this purpose, I have conducted research into the following areas: (1) the historical development of Middle English negation and the development of the auxiliary "do" in Early Modern English; (2) verb complementation (i.e. "that" -clauses, infinitives, and gerunds dominated by verbs); and (3) some morphological features including the addition of adverbial -s (as in "always" from late Middle English to Early Modern English). I have also made an effort to contextualize the change of language from Middle English to Early Modern English within the entire history of the English language, paying a particular attention to its impact on Present-day English.

研究分野：英語史

キーワード：英語史 中英語 初期近代英語 コーパス言語学 統語論 形態論 綴り字

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 伝統的な英語史研究における中英語と初期近代英語の扱い

英語の歴史は、5世紀の半ばにアングロ・サクソン人がブリテン島に移住してから現在までの約1500年といったところであるが、その流れは必ずしも単調なものではなく、比較的变化が大きな「変動期」がいくつか存在する。本研究が扱う中英語期(1100年頃～1500年頃)と初期近代英語期(1500年頃～1700年頃)は、いずれもその「変動期」にあたるというよい。

加えて、従来の英語史研究が、現代英語から比較的遠い時代を分析の対象としてきたこともあり、中英語も初期近代英語も、これまでに多くの研究者がさまざまなアプローチで取り組んできた分野であるということが出来る。

しかしながら、中英語と初期近代英語の連続性に焦点が当てられてきたかという点、必ずしもそうではない。英語史研究者の間では、いわば中世を研究対象とする場合とそうでない場合という大まかな区分があり、これが中英語と初期近代英語を連続的に考察することの妨げとなってきたともいえる。本研究は、このような学術的背景を意識した取り組みである。

### (2) コーパス言語学の動向と歴史社会言語学の展開

本研究を特徴づけるものとして、コーパス言語学の手法と歴史社会言語学的な言語観察の手法があるので、この二つの観点から、研究開始当初の学術的背景を記述することにする。

1991年に英語の最初の史的コーパスといわれる Helsinki Corpus が公開されてから、ほぼ25年の歳月が経過し、この間に英語史研究とコーパス言語学を取り巻く環境も大きく変化してきた。近年しばしば使用される第一世代コーパス、第二世代コーパス、第三世代コーパスという用語は、この研究動向の変化を端的に示すものである。

より具体的には、Helsinki Corpus に代表される第一世代コーパスは、ジャンル等のバランスを意識したコーパスで、現代英語の Brown Corpus や LOB Corpus 等の編纂の在り方をモデルとして構築されたものがある。残念ながら、コーパスとしての規模が現在の基準から見ると小さいことが難点で、現在では、第一世代コーパスのみを用いた研究は少なくなってきた。しかしながら、英語史研究者の間に、ジャンルへの「気づき」を促した効果は大きく、この点が、第二世代の特殊ジャンルコーパスへの橋渡しをすることになった。

第二世代コーパスは、ジャンルのバランスを意識した第一世代コーパスとはむしろ対照的に、特定のジャンル、たとえば書簡のみ、医学関係の文献のみ、というように集積の対

象とするデータを絞り込んだコーパスである。当然のことながら、レファレンスコーパスとして、Helsinki Corpus のような多様なジャンルを含む第一世代コーパスが存在していることが前提で、両者を比較することにより、第二世代コーパスの有効性が最大化されるということが出来る。

近年は、すでに第三世代コーパスという用語が頻繁に使用されるようになった。これは第一世代、第二世代を踏まえた上での展開である。英語史研究者が公開されているコーパスに依存していた状況から脱却し、自由にコーパスを組み合わせながら、あるいは新たにコーパスを作成しながら、研究の対象とするデータの範囲を定めていくという考え方である。研究を取り巻く技術的な環境が整い、多様なコーパスが利用可能になってきたこと、個人レベルでの文献の電子化が容易になってきたことなどが、この動向を後押ししているということができよう。この流れを受けて、本研究においても、独自のコーパスの構築を行うこととした。このコーパスは、世代的用語でいうならば、第三世代コーパスだということができる。

次に、近年英語史研究者の関心を集めている歴史社会言語学という観点から、学術的背景を述べることにする。英語史研究といえは古英語や中英語のような「古い時代」をもちばら研究の対象とするという時代は終わり、現在では、分析の対象が広範に広がってきている。後期近代から現代にかけての英語を集積したコーパスの構築が積極的に進められてきたこともあり、現在では、18世紀、19世紀、20世紀も英語史研究の主要な対象となっている。本研究は、中英語と初期近代英語の連続性に焦点を当てるものではあるが、この時期の英語の変化が現代英語を理解する上でどのような意味をもつかは、研究の過程で意識すべき重要な課題であると考えた。

このように、英語史研究が現代英語研究との連携を強める過程で、現代英語研究のさまざまな知見が英語史研究に応用されるようになってきたことは、英語史研究の可能性を広げる役割を果たしてきたといえる。その一つとして、現代英語研究において一定の成果をおさめてきた社会言語学の考え方が英語史研究に応用されるようになってきたことを挙げることができる。現在では広く知られるようになった歴史社会言語学という分野の確立である。社会言語学ではよく知られた bad data problem などの概念は、文献資料の完全性を求めることが必ずしも現実的とはいえない史的コーパスの構築等においても、重要な示唆を与えてくれる。

## 2. 研究の目的

以上のような学術的背景を踏まえて、本研究では、中英語期と初期近代英語期を、同時に分析の対象とした。いずれも言語変化が大きかった時代であるので、それぞれ単独でも

興味深い研究結果を期待することができるが、あえて両者の連続性を浮き彫りにすることを旨として研究計画をたてた。

研究を進めるにあたっては、両時代の言語変化における類似性と差異に注目すること、両時代を継ぎ目なく貫く変化の実態を明らかにすること、両時代を統合的に解釈することで、現代英語の理解に資する議論を行うことを目的とした。またその際に、上述のような研究動向を受けて、コーパス言語学等の研究手法を導入しながら十分な資料にあたること、歴史社会言語学的な知見を盛り込みながら、言語の歴史を多面的に観察することも意図した。扱う時代を広げることで、分析や議論がかえって単調になることを避けるためである。

### 3. 研究の方法

研究の方法は、大きく分けて分析の対象とするコーパスの選択、必要に応じてコーパスの構築を行うこと、そしてその言語分析からなる。

まずコーパスについては、一般に公開されているコーパスを利用するとともに、独自に電子テキストを集積したコーパスの作成も行うこととした。これは、分析の対象とするデータに独自性を追求する第三世代コーパスの考え方によるものである。公開されているコーパスとしては、改訂によって質量とも充実し、初期近代英語期以降を網羅する A Representative Corpus of Historical English Registers (ARCHER)を利用するほか、中英語から初期近代英語の分析結果を相対化するために、各種現代英語コーパスも利用することとした。

第三世代コーパスの構築については、電子化された文献を大量に集積したデータベース、Early English Books Online (EEBO)からテキストを選別し、研究目的に合致した第三世代コーパスを構築することとした。本研究を開始するまでの段階で、すでに初期近代英語については Early Modern English Prose Selections (EMEPS)の version 1 を構築していたので、このコーパスの有効性の確認、必要に応じて改訂を進める作業を行うこととし、新たなコーパスとしては中英語のものを構築することとした。EEBO の文献はそのほとんどが初期近代英語期のものであるが、一部に中英語期に出版された書籍が含まれ、その数も相当数にのぼるので、これを用いてコーパスを作成する計画を立てた。

次に言語分析についてである。上記のようなコーパスの構築には時間がかかるので、現実的な研究方法としては、まずは一般公開のコーパスとすでに作成が終わっていた EMEPS の version 1 を中心に言語分析を進めることとし、形態、統語等を中心に分析計画を立てた。なお、中英語・初期近代英語の文献では綴り字の異形が多数存在するので、文字列を中心に必要なデータを抽出する方

法を取らざるを得ない。このため、まず必要と想定される語を文字列検索で抽出し、そこから文法機能等を明らかにしていく form to function の手法を取ることにした。

具体的には、まず、これまで研究を続けてきた否定構文(この場合も form to function の手法を取ることで、否定語を個別に抽出することから始める)や動詞の補文の構造について、本研究が目的とする中英語と初期近代英語の連続性、および通時的な展開のメカニズムといった軸を中心に新たなデータを追加して検討を重ねることとした。また、少しずつ研究を開始していた形態論についても研究を拡張し、特に副詞を作る語尾やその関連分野の研究を進めることにした。

最後に、中英語や初期近代英語研究から出てきた知見を現代英語や英語史全体の枠組みで相対化するために、必要に応じて、現代英語との比較対照も行うことにした。

### 4. 研究成果

研究成果は、大きく以下の4点に分類することができる。

#### (1) 新たなコーパスの構築と英語史研究におけるコーパスの役割を概観する作業

公開のコーパスと、すでに作成していた EMEPS, version 1 を利用することに加えて、新たなコーパスを編纂することは、本研究の中心的課題であった。そこで研究期間の最初からこの作業に着手し、中英語の初期印刷本を集積した Selected Middle English Texts in Print (METiP)を作成した。このコーパスは印刷本の Geoffrey Chaucer, John Trevisa, Thomas Malory, William Caxton, その他の宗教関係テキスト、から成る。Chaucer や Malory といえば、これまで中英語研究者の間では、写本、あるいは写本に基づく校訂版を分析することが一般的とされてきた。しかし本研究では、このような文献についても、初期印刷本のデータからコーパスを編纂するという枠組みに収まるものと考えた。～ は、それぞれ約 30 万語から 35 万語から成り、METiP の総語数は約 175 万語である。

コーパスに関する第二番目の研究成果は、英語史研究におけるコーパスの役割を概観する作業を行ったことである。「研究開始当初の背景」のところでも述べたように、英語の最初の史的コーパスである Helsinki Corpus が公開されてから 25 年あまりの歳月が経過した。その間に、コーパスが第一世代、第二世代、第三世代と発展を遂げてきたことは、上述の通りであるが、その波及効果は、英語コーパス言語学の分野内にとどまることなく、英語史研究の枠組み、さらには現代英語研究も含む英語学研究の枠組み全般に及んでいる。「英語史研究におけるヴァリエーションの扱い 歴史社会言語学と歴史語用論の実際」(学会発表)では、これを

検証する作業を行った。明らかになった主な論点は、コーパス言語学の広がり、英語史研究と現代英語研究の間の連続性が意識されるようになってきたこと、またその過程で現代英語研究におけるさまざまな理論的な枠組みが英語史研究においても応用されるようになってきたこと等である。本研究の主要なテーマは中英語と初期近代英語の連続性であるが、その背景には、英語史全般と現代英語研究の連続性という大きなテーマがあることが明らかになった。

#### (2) 中英語の否定構文から初期近代英語における do の拡張

中英語と初期近代英語の連続性の観点から分析を行った具体的な文法項目の一つは、否定文における助動詞 do の拡張である。これまでの先行研究では、助動詞 do の拡大は初期近代英語における特徴的な現象の一つとして、個別に議論されることが多かった。一方、本研究では、研究代表者がこれまで研究を重ねてきた中英語の否定構文の発達の延長線上で初期近代英語のデータを観察することにより、両者を連続的に解釈することが可能であることを明らかにすることができた。その成果を発表したのが、「英語の否定構文と Jespersen のサイクル」(学会発表)と“Jespersen’s Cycle and the Expansion of Periphrastic *do* in English”(雑誌論文)である。主要な論点は、中英語期に起こった否定構文の変化と初期近代英語期に起こった助動詞 do の拡張には、否定の強弱というシンプルだが一貫した要因が働いているというものである。

#### (3) 動詞の補文研究とその拡張

動詞の補文の構造についても、研究方法のところで述べた form to function の手法を用いて、動詞を手掛かりに、that 節構文、不定詞構文、動名詞構文等を取り上げ、その交替を扱った。これまで初期近代英語を含む時代についての研究の蓄積がある forbid については、時代を通じた変化の連続性に焦点を当てながら現代英語を含む英語史全体に照らしての解釈を行い、“Recent Changes in the Use of the Verb *forbid*”(雑誌論文)、*Forbid* の from -ing 構文 通時的・共時的視点から見た現代英語の変化」(学会発表)、*Recent Grammatical Changes in Contemporary British English: Verb Complementation in Academic Writing*(学会発表)、『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』(図書)として、論考をまとめた。

使役動詞の *make* については、本研究の開始以前に中英語についての個別の調査を行っていたので、本研究では、初期近代英語期の変化について調査を行った。これをまとめたのが、“Syntactic Variation and Change Relating to Causative *make* in Early

Modern English”(学会発表)である。なお、この論考は印刷中の *Explorations in English Historical Syntax*(図書)に収められている。中英語ではまだ一般的であった to 不定詞が、使役構文に特有の原形不定詞に置き換えられていく様子を明らかにすることができた。

最後に動詞の *doubt* については、これまでに英語史全般を通じたデータの蓄積があるので、本研究では特に初期近代英語期の補文交代をさらに細密に分析することとし、Thomas More の文献に焦点を当てた。その論考は *Language Contact and Variation in the History of English*(図書)に、“The Spelling and Syntax of *Doubt* in Early Modern English: Variation and Latin Influence”として収められているが、研究の過程で、副次的に *doubt* の綴り字が、Thomas More の文献のある時期から変化することを明らかにすることができた。いわゆる語源的綴り字の導入、すなわち発音しない *b* が挿入される現象であるが、同一の著者が書いた文献であっても書物の出版年によって綴り字が異なることが明らかになった。ただし、異綴りは印刷過程で導入された可能性もあるので、この点についてはさらなる調査が必要であろう。また、語源的綴り字は一般に初期近代英語期の現象であるといわれるが、近年の研究では中英語期から少しずつ導入されたことも指摘されており、この点についても、今後、中英語と初期近代英語の連続性の観点から深めていくことが可能であると思われる。

#### (4) 副詞 *always* に付加された -s

研究結果の最後は、形態論に関するものである。副詞の *always* は、初期近代英語のはじめごろまでは、語尾の -s がつかない形で現れることが多いが、16世紀の半ば以降、急速に、現在のように -s を付加した形が増加する。研究代表者は、すでに初期近代英語について研究を重ね、研究成果の発表も行っていたので、今度は時代をさかのぼる形で、中英語文献の調査を進めた。その結果、頻度は低いものの、中英語においても *always* のように -s を付加する形が現れること、文献によっては -s が付く形態の方が普通であることなどが明らかになった。すなわち、初期近代英語期以降に本格的な広がりを示す -s 語尾の付加は、すでに中英語後期の文献においてその兆候を示していたといえる。

また中英語については、*always* だけでなく同様の意味をもつ *Old Norse* の系列である *algate(s)* についても調査を行った。こちらについても、中英語期に *algate* と *algates* の交替が見られた。一般に -s が付加されるのは *always* からの類推であると考えられているが、本研究の調査では、*algate* に -s を付加する傾向の方が *always* に -s を付加する傾向より顕著であり、むしろ影響関係は逆である可能

性があることがわかった。この議論は、“On *Alway(s)* and *Algate(s)* in Middle English Again” (雑誌論文) にまとめた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Yoko Iyeiri, “On *Alway(s)* and *Algate(s)* in Middle English Again”, *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University*, 査読無, 55, 2016 年, 61-80.

Yoko Iyeiri, “Recent Changes in the Use of the Verb *forbid*”, *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University*, 査読無, 56, 2017 年, 195-218.

Yoko Iyeiri, “Jespersen’s Cycle and the Expansion of Periphrastic *do* in English”, *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University*, 査読無, 57, 2018 年, 99-133.

〔学会発表〕(計 6 件)

Yoko Iyeiri, “Syntactic Variation and Change Relating to Causative *make* in Early Modern English”, 18th International Conference on English Historical Linguistics, 2014 年 7 月 16 日, KU ルーヴェン大学.

家人 葉子, 「*Forbid* の from -ing 構文通時的・共時的視点から見た現代英語の変化」日本英語学会第 33 回大会(招待発表), 2015 年 11 月 22 日, 関西外国語大学.

Yoko Iyeiri, “Recent Grammatical Changes in Contemporary British English: Verb Complementation in Academic Writing”, 2016 Hawaii University International Conferences on Arts, Humanities, Social Sciences and Education, 2016 年 1 月 9 日, ホノルル.

家人 葉子, 「コーパス時代の英語学研究と歴史社会言語学の潮流」関西言語学会第 41 回大会シンポジウム「歴史言語学の新しい潮流 歴史語用論と歴史社会言語学」2016 年 6 月 11 日, 龍谷大学深草キャンパス.

家人 葉子, 「英語の否定構文と Jespersen のサイクル」日本英語学会第 34 回大会シンポジウム「意味・機能の縮小と拡張」2016 年 11 月 13 日, 金沢大学.

家人 葉子, 「英語史研究におけるヴァリエーションの扱い 歴史社会言語学と歴史語用論の実際」第 1 回 HiSoPra\*研究会(歴史社会言語学・歴史語用論研究会)大討論会「社会と場面のコンテクストから言語[変化]の歴史を見るということ 歴史社会言語学・歴史語用論の現在そして未来」2017 年 3 月 14 日, 学習院大学.

〔図書〕(計 3 件)

小川 芳樹・長野 明子・菊地 朗・秋

元 実治・家人 葉子・大室 剛志・金澤 俊吾・ほか『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』開拓社, 2016 年, 453 ページ.

Uchida, Mitsumi, Yoko Iyeiri and Lawrence Schourup, John Seahill, Yoshitaka Kozuka, Joseph Emonds, Jan Terje Faarlund, Tomohiro Yanagi and Yasutaka Imai, Language Contact and Variation in the History of English, 2017 年, Kaitakusha, 166 ページ.

Hubert Cuyckens, Hendrik de Smet, Liesbet Heyvaert, Charlotte Maekelberghe, Yoko Iyeiri, ほか, *Explorations in English Historical Syntax* (印刷中), 2018 年, John Benjamins.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等  
該当なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
家人 葉子 (IYEIRI, Yoko)  
京都大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号: 20264830

(2) 研究分担者  
該当なし

(3) 連携研究者  
該当なし

(4) 研究協力者  
該当なし

(合計 1 名)